



Title	苫小牧地方演習林の広葉樹林施業
Author(s)	国安, 敏夫
Citation	北海道大学演習林試験年報, 1, 88-89
Issue Date	1984-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/72603
Type	bulletin (article)
File Information	1982_2-16.pdf



[Instructions for use](#)

II-16 苫小牧地方演習林の広葉樹林施業

国 安 敏 夫

1 広葉樹林

昭和25年2月に、苫小牧演習林上幌内事業区の官行事業に従事して以来、早いもので34年になろうとしている。はじめて見て気付いたことは、太きのわりに樹高の低いことであった。針葉樹の60cmくらいのもので20~24m、広葉樹の同じくらいのもので18~20mほどしかない。その中には、枝を払わなければ伐倒できないような針葉樹も少なくなかった。広葉樹も枝が強く、枝下12尺の丸太が1本、それ以下の木も少なくなかった。しかし、シナノキ、カツラ、ハリギリ、ウダイカンバ等は成長も良く、12尺が2~3丁とれる立派な立木も伐採されていた。

混交率は広葉樹が70%くらいを占めていた。広葉樹が多いのは、針葉樹1本1本を広葉樹で包むような形で共生していたからである。他地域（日高方面）とは始めから針広の混交度合が違っていた。このような立派な林も、昭和29年の洞爺丸台風により、数時間で全滅に近い大被害を受け、今日に至っている。上幌内と熊の沢の一部には、昔を思わせる林がまだ残っている所もあるが、台風前のような林でないことは言うまでもない。しかし、29年の風害跡地にも、若い広葉樹が密生し穴を埋めてくれた。当林の林は、空地ができると広葉樹の幼木が密生してくるので、山作りをする者には、たいへんありがたい山である。

また、昭和56年にも15号台風に荒らされたが、広葉樹の方は被害が少なかった。29年・56年の強烈な台風にも負けずに生存しているエゾマツは、今年も美しい淡紅色の花を咲かせていた。広葉樹林の中にはエゾマツが生育し始め、50~150cmくらいのが少量ながら散見され、たのしめる山となりそうである。

林業技能補佐員の人たちも山好きな人ばかりで、ツルが木に巻きついているのを見ると、誰に言われることなく取ってやる。またエゾマツの幼樹を見ると回りを刈り払ってくれるなど、小さなことまで見守ってくれている。樹木は今、昔のような蓄積 ha 当り400m²以上の林になろうと生長を続けている。

2 目的および作業内容

本林の施業区は4分されていて、幌内、上幌内、山の神、熊の沢事業区となっている。

昭和49年より針葉樹の新植事業を制限し、既存の若い造林地の保育作業の徹底が図られることになった。さらに55年からは、幌内・山の神地区を8施業区に分け、毎年一施業区ずつ広葉樹林、人工造林地を含む総合的な施業が開始され、現在に至っている。

これらの地区は、大正4年からカラマツ、トウヒ、トドマツなどが植林されている所で、戦前戦後の人手不足で、手入れが行き届かなかった不成功造林地も多いが、現在では立派な二次林になっている所もある。樹齢30年余で直径8~14cm、樹高8~12m、それに植栽されたエゾマツ、アカエゾマツ、トドマツなどがわずかに混生している。このような所の他に、34年頃まで生産されていた木炭材伐採跡の二次林もあり、広葉樹の育成作業は止まることはない。今年も造林地の間伐と広葉樹林の整理伐が始まっている。

広葉樹林の施業内容は、枯損木、風倒木、傾斜木、暴領木を主に伐木造材を行うことであるが、表土や立木の根を傷めないために、地面が凍結する12—3月まで行うようにしている。この場合でも残した立木を傷めないため、全幹集材はしていない。手入れの終わった林木は、幼齡樹であっても主伐候補木であり、回期ごとに見回り、必要に応じて択伐をしながら有用大径木に育てて行くつもりである。

3 仕組および手順

本林のすべての施業は、業務掛員と林業技能補佐員(8名)で行っている。伐木造材、雑木刈払などの作業にかけてはベテランぞろいである。幼齡の広葉樹林の選木もすっかり身についたようだ。初年は切る木、残す木の見分け方にも個人的に差があり、でき上ってからいろいろな手直しをしてもらったが、4年目の今では、まったくその差はなくなった。仕事も一度で仕上がるとう分の良いものである。

本林の広葉樹林の手入れは、刈払機での選木から始まる。胸高直径10cm以下の枯損木、傾斜木、暴領木、雑木等を刈払う作業である。この場合、幼齡樹であっても形も良く、良質なものは残す。次に10cm以上の立木を、同じように一本一本吟味しながら調査し造材する。この場合、チェーンソー3台に技能補佐員6名、ドーザーショベル運転に1名、土場巻立に1名というメンバーで行っている。このような作業から生産される素材は、年間少ない年で800m³、多い年で1,000m³以上である。素材は7cmくらいから生産され、太いもので20cmくらいのももある。平均で12cmにしても0.035m³、1,000m³では28,571本となる。生産することもたいへんな仕事だが、これを整理する事務補佐員の女子職員も大仕事である。樹種も35~40種もあり、0.001m³の間違いも許されない仕事を手際よく片付けてくれる。

また若い広葉樹林は刈払機で仕上げるが、この作業がいちばんむずかしい仕事である。100種類もの樹木が密生しているその中から、大径木になるミズナラ、ハリギリ、カツラ、ウダイカンバ、シナ等の形質の良いものを残すようにし、さらに風に強い木をバランス良く残すことが大事である。このような作業は、当林以外では見ることのできない特技である。この中の空地にアカエゾマツやエゾマツを植込む天然更新補助作業も予定されている。こうした施業も小面積づつではあるが、始めてから4年目になり、あと30~50年もたてば、昔の森林よりも樹形の良い林になり、外部の方にも見てもらえる針広混交林になると思う。